

一九八〇年出土の木簡

概要

1

本号には、一九八〇年に全国各地の遺跡から出土した多くの木簡に関する報告を収録した。木簡学会の依頼に応じて、御多忙中にもかかわらず、諸報告をお寄せいただいた関係各位に対して、厚く御礼申し上げたい。本号には、合計二〇報告を収録することができたが、そのうち石川県の桜町および御館遺跡はともに一九七八年に、また多賀城跡第三四回調査は一九七九年に調査されたものであり、また、静岡県の御殿・二之宮遺跡（一部創刊号に報告済）と兵庫県御着城跡は、一九八〇年以前から調査が開始されていたものである。また、福岡県の大宰府学校院跡の調査は、一九八一年に行なわれたものであるが、これも収録している。一方、一九八〇年に木簡を出土した遺跡のうち、平城宮東院園池西南地区（二〇次調査）、法華寺阿弥陀浄土院跡（二一・二三〇次）、平城京左京三条二坊六坪

（二二・二三次）の三遺跡については、すでに本誌第二号に報告済である。また、長岡京左京二条二坊出土木簡の一部は、次号に報告が期待される。

2

第1表は、各報告によりつつ木簡出土遺構に則して、その年代および性格を整理したものであり、第2表は、各遺跡別の出土木簡数と木簡

古代	都城 地方官衙・城柵 寺院 集落 道路・運河 学校跡 ?	平城宮跡、平城京跡、藤原宮跡、長岡京跡 多賀城跡、御殿・二之宮遺跡 法華寺跡（平城京跡） 大蔵司遺跡、西沖遺跡 稗田遺跡 大宰府学校院跡 野田地区遺跡
中世	館・城郭 集落 寺院 ?	御着城跡、鶴・城山遺跡 野路岡田遺跡、桜町遺跡、白山橋遺跡、草戸千軒町遺跡、御殿・二之宮遺跡 観世音寺跡
近世	?	御殿・二之宮遺跡
不明		漆町西遺跡、御館遺跡、野田地区遺跡

第1表 木簡出土遺構の性格

新出遺跡か否かを整理したものである。これらによると、古代の遺構から出土した木簡が圧倒的に多いが、特に藤原宮跡出土の一五五七点（そのほとんどは第二九次調査東面大垣地区の外濠から出土）が群をぬいて大量であり、長岡京跡・平城宮跡・同京跡がこれにつづく。これらの古代都城跡からの出土点数は、全体の九割を優に越えている。これに対して、それ以外では、奈良県稗田遺跡の一八点、広島県草戸千軒町遺跡の六九点が目立つ程度で、他は数点程度の出土例が多くを占めている。本誌創刊号・第二号の本欄でその多さが指摘されていた古代地方官衙・城柵からの出土は、一九八〇年には非常に少なかった。

遺 跡 名	所 在 地	点 数
平城宮跡	奈良市	146
平城京跡(6カ所)	"・大和郡山市	79
藤原宮跡	奈良県橿原市	1557
※ 稗田遺跡	奈良県大和郡山市	18
長岡京跡(2カ所)	京都府向日市	658
※ 大蔵司遺跡	大阪府高槻市	3
※ 西沖遺跡	三重県大山田村	1
御殿・二之宮遺跡	静岡県磐田市	4
※ 野路岡田遺跡	滋賀県草津市	1
多賀城跡	宮城県多賀城市	4
※ 漆町西遺跡	石川県小松市	1
※ 桜町遺跡	" 穴水町	1
※ 白山橋遺跡	" "	1
※ 御館遺跡	" "	2
※ 御着城跡	兵庫県姫路市	1
※ 鷗・城山遺跡	" 太子町	1
草戸千軒町遺跡	広島県福山市	70
※ 野田地区遺跡	和歌山県吉備町	5
観世音寺僧房跡	福岡県太宰府町	10
大宰府学校院跡	" "	9

第2表 1980年出土木簡一覧表 ※木簡新出遺跡

木簡新出遺跡は十一カ所にのぼる。このところ毎年この程度が、木簡出土遺跡一覧表のリストに加わっているが（創刊号十二カ所、第二号十三カ所）、この傾向は今後も続くものと思われる。これらの新出遺跡のうち、古代は五遺跡（稗田遺跡・大蔵司遺跡・西沖遺跡・大宰府学校院跡および野田地区遺跡の一部）であり、一九八〇年は中世以降の木簡新出遺跡の増加が相対的に目立った年であったといえる。

3

つぎに、各遺跡の出土木簡について概観したい。

平城宮南面東門の南側の二条大路北側溝からは、計一四六点が出土した。そのうち、考課関係木簡と造兵司移の文書木簡は、伴出の墨書土器の「兵部」「兵部厨」「民厨」「兵厨」などの墨書銘とともに、近くに兵部省・兵部厨・式部省・民部厨などが存在したことを示唆するものである。このうち式部省の所在地については、一九六六年度の宮東南隅部の調査（第三二次補足）において、宮南面大垣（SA四二〇―A）の北雨落溝（東流）から出土した大量の考課関係木簡からも、その西方位置に推定されていたところであるが、今回の調査によって、その推定を補強する史料がえられたことになる。また「□奴大魚」ではじまる「浪人」関係木簡も注目されるが、すでに平城宮第二二次調査や秋田城跡第二五次調査で、「浪人」「浮浪人」の貢進物付札が出土している。

平城京内では、東二坊坊間大路の二条部分の西側溝から、伊勢国の調銭の付札が一点出土している。従来の調銭付札はいずれも郡まで記され一貫ずつまとめられていたが、今次のものは郷まで記し（年紀からみて郷里制下の木簡であるが、里名までは記していない）、さらに個人名を記してしかも一貫とある。この木簡の年紀の前年では、畿外の調銭は正丁一人十八文のはずであるから、この人物個人の輸す調銭としては説明がつかない。一〇四次調査出土の和銅年間のものとみられる調銭付札の裏面には、個人名が記されている。これとの関連で今回出土の木簡の個人名を考えるべきであろう。

平城左京五条五坊七坪からの出土例は、外京地区におけるはじめての出土例として注意される。うち一点は、人形の胴部に墨書されたものであり、削りかけ・土馬などとともに井戸底から出土した点からみて、何らかの祭祀に関係するものであろう。

平城京内の法華寺旧境内からは、兵衛関係の木簡や尼房と関係するかとみられる木簡も出土している。また、出挙関係の木簡も注目される。この木簡は何の出挙に関するものなのか明らかでないが、月借錢の木簡は、すでに平城宮第十三次調査で出土している。

藤原宮跡東面大垣地区の外濠からは、前述のごとく大量の木簡の出土をみた。文書木簡では、第二七次調査（本誌第二号）につづいて出土した「皇太妃宮職」関係木簡が注意されるが、衛士関係木簡も二四次（創刊号）・二七次調査で出土している。また、宣命木簡、

門号を記したものなども興味ぶかい。付札では、畿内の薦の貢進物付札がまとまって出土した。さらに新しい評史料が増加したが、そのうち「弟国評」（山背国）が注目される。これによって、大宝令施行時の郡（評）の分割説の有力な根拠がゆらいだことになる。また南面の外濠からは「考仕令」と墨書のある木簡が出土している。

長岡京跡では、第十三次調査（創刊号今泉論文参照）と第二二次調査（創刊号）で、合計三百数十点の木簡を出土したSD一三〇一東西溝の延長部分から、ふたたび一六九点の木簡が出土した。そのなかには、前二回の調査でも出土していた造営関係の木簡が、まとまって存在する。同じく前二回の調査では、太政官関係の木簡や墨書土器が出土して注目されたが、今回も、「外記」「官」などの墨書土器が出土している。そのほか、「海調」の語を記す木簡も注意される。また、同左京二条二坊の三町と六町の町間小路の東西両側溝から出土した木簡中には、地子木簡がみられるが、第十三次調査で出土したものは様相を異にしている興味ぶかい。白米の貢進札も多く、また讃岐・伊予・美作・長門などの山陽・南海道諸国の貢進物付札が多い点も目につく。

稗田遺跡では、下ッ道とその西側溝、運河として用いられた可能性のある大規模な東側溝、平城京東南隅付近から斜行する人工河川とそれにかかる橋の跡などが検出されたが、その河川と東側溝から木簡が出土した。それには衛士府関係のもの、貢進物付札・習書木

簡などが含まれている。これらと遺跡との関係は明らかでなく、その究明は今後の課題であろう。

畿外地方の出土例では、御殿・二之宮遺跡から「駅家人」の木簡が出土している。多賀城南辺築地西半部の南の大溝からは、平安時代の呪符が一点出土したが、中世の例としては、石川県の白山橋遺跡出土のものが注意される。これは、中央に立木のある土壇の北隅に倒立状態でささっていたもので、文字は判読できない。もしこれが呪符とすると、倒立の出土状態は、伊場遺跡のいわゆる「百怪呪符」と同様であり、倒立には何らかの意味が込められているのかもしれない。また呪符は、これ以外にも、石川県の桜町遺跡、広島県草戸千軒町遺跡からも出土している。

以上にとりあげた木簡以外にも、言及すべきものは多いが、各報告によらねたい。

4

一九八〇年の出土例では、呪符や卒塔婆など、何らかの宗教的行為にかかわる墨書をもつ木片が多かった。前述の多賀城跡出土の呪符、白山橋・桜町・草戸千軒町の出土例、平城左京五条五坊七坪の井戸から出土した、胴部に人名を記す人形、兵庫県鶴・城山遺跡、和歌山県野田地区遺跡の卒塔婆・笹塔婆、大宰府学校院跡出土の卒塔婆風のものの、その他である。これまでに、呪符や物忌札その他は、伊場遺跡・草戸千軒町遺跡ほかから出土しており、元興寺極楽

坊でも大量に発見されている。現在でも、たとえば滋賀県大津市の日吉神社では、「願串」と称する、長さ二四一ミリ、幅三九ミリ、厚さ三ミリの祈願のための木札が用いられている。これらの宗教的遺物は広範に用いられ、今後も出土する可能性は大きいであろう。これらは、「木簡」としてあつかうにはふさわしくないかもしれないが、木簡の定義を精密にするためにも、またその遺跡の性格を明らかにし、他の出土遺物や木簡の理解を進めるためにも、このような一群の宗教的行為にかかわる墨書のある木札の検討は、深められねばならないと考える。

(榮原永遠男)

凡 例

一、以下の原稿は各木簡出土地の調査機関に依頼して、執筆していただいたものであるが、体裁および積文の記載形式については編集担当の責任において調整した。

一、原稿の配列はほぼ奈良時代の五畿七道の順序に準じた。

一、積文下段のアラビア数字は木簡の長さ・幅・厚さを示す(単位はミリメートル)。欠損している場合の法量は括弧つきで示した。

その下の三桁の数字は型式番号を示す。またそれぞれの発掘機関での木簡の通し番号は最下段に示した。

一、積文に加えた符号は次の通りである(六頁第一図参照)。